

# 宗教的存在観についての研究

——親鸞の仏身仏土観を中心として——

中山 彰 信

## 要 約

学術大会のタイトルが「宗教—存在の深層へ」ということであつた為に宗教的存在とは如何なることで、如何なる意味を考えるものであろうか。ということについて考えていくうちに仏身仏土観に行きあたる。その仏身仏土観を考えた場合、親鸞は如何に捉えていたかに疑問を感じ、本人の捉え方について考察してみることになる。

特に、仏身仏土の問題は、宗教的存在観として考えられるものであろう。仏身仏土は視覚的存在としては証明出来ないものである。しかし、生死の問題としては大切な存在の問題と考えるからである。

親鸞は主著『教行信証』『真仏土観』の冒頭に、真仏とは「不可思議光如来」、真土は「無量光明土」と仏身仏土を示し、その仏身仏土が「大悲の誓願に酬報するが故に、真の報仏土と曰ふ」と示し、光明無量・寿命無量の二願を示している。その後、『願成就文』を引文され、無量寿仏の光明が最尊第一の光明であることを示し、その意味を十二光仏によって領解される。又、その働きが積極的活動的な働きの光明であることを明かされる。

その後に『涅槃経』を多く引文される。そこには、衰えることのない如来である故に、それはまた智慧であることが示され、如来は涅槃・無尽・仏性・決定・阿耨多羅三藐三菩提と明かされる。さらに、涅槃は静止的な理法ではなく、どんなものにも影響されず、活動する動的な存在であることを明かしている。

そのようなことを領解した親鸞は、光明の真理的存在性を『浄土論』『浄土論註』に求めたと考える。天親は「尽十方無碍光如来」の真の仏としての徳を明かされ、真仏土が「三界の道に勝過し、究意して虚空の如く、廣大にして辺際なき世界」と示される。このことを受けた曇鸞は、『浄土論』を、浄土の所在を示す文と考えられ、浄土の功德である三嚴二十九種莊嚴は、無為法身である一法句を依り所としていることを示される。そのことは、法そのものが自ずから活動している自然の姿であることを明かす。往相・還相二回向の働きが、根源の本質的働きであることを明かし、又、法蔵菩薩の願行が成就し、浄土が建立されていることを明かすもので、浄土の存在が空想的なものでないことを示している。

又、善導の『観經四帖疏』によって、「因願酬報」としての「報」の意義を明かし、如来が因の願に酬いて成仏した「酬因の身」であ

ることを示す。又「是報非化」によって、浄土の根源は絶対的常住の存在であることを明かす。

親鸞は、仏身仏土は物理的空想的な在り方ではなく、意味的・象徴的存在として捉えられていると考える。又、浄土は過去・現在・未来の三世を超えた永遠・常住の世界で、また不可思議の真実・光明の世界であり、娑婆・穢土に光明となって永遠に働きかける存在と考えられる。

## 序

今回のタイトルを「宗教的存在観についての研究」とさせていだいたことは、学術大会のタイトルが『宗教—存在の深層へ』ということであつたために、宗教的存在とは如何なることで、如何なる意味を考えるものであろうかということについて考察してみることにしたものである。

その思いは存在 (Sein) といえは、私の日常性の中で捉える範囲・現存在 (Der Sein) を考えがちであるが、よく考えてみれば、私の捉えられない日常性を超えた存在が私たちの世界には多く存在している。特に、実存の問題にしても私たちを生かしている見えない世界の存在を忘れてはいけないのでないか。そのことを考えると宗教的存在とは、私たちに如何にかかわり、私たちを如何に生かしているか、「生き方」にかかわる見えない存在とはいえないだろうか。宗教には、私達にとつて納得しがたい面が多くあり（現代の科学は、科学的に説明できることが真実とされ、科学の進歩が幸福につ

ながつていふと考えられている。)そこには宗教的存在観が欠けていないだろうか。そのようなことを考えてみた場合、宗教的存在観とは如何なることであらうか。特に、身土すなわち仏身仏土の問題は宗教的存在観として考えてよいのではないだろうか。私たちは浄土・極楽などは、何か空想的に考えられがちである。この仏身仏土は現実的存在としては証明できないものではないだろうか。しかし、生きているわれわれにとつては、仏身仏土は生死の問題でもある。視覚に捉えられない存在についてどのように考えられるべきものであるかということが、今回の大会のタイトルと考え、私の問題と考える仏身仏土観について考察してみるものである。特に、仏身仏土については多くの説があるが、今回は親鸞の仏身仏土観がいかなる存在の意味をもっていたかについて考がえてみたい

## 一

『教行信証』『真仏土巻』のはじめに、親鸞は

謹按眞佛土者、佛者則是不可思議光如來、土者亦是無量光明土也。然則酬報大悲誓願故、曰眞報佛土。既而有願、即光明・壽命之願是也。<sup>1)</sup>

(つつしんで眞仏土を案ずれば、仏はすなはちこれ不可思議光如来なり、土はまたこれ無量光明土なり。しかればすなはち大悲の誓願に酬報するがゆゑに、眞の報仏土といふなり。すでにして願います、すなはち光明・寿命の願これなり。)

と示している。真仏は「不可思議光如来」、真土は「無量光明土」と仏身仏土を示し、その仏身仏土が「大悲の誓願に酬報するが故に真の報仏土と曰ふ」と示して、光明無量・寿命無量の二願の名を挙げている。このことは、親鸞が真仏真土とは「仏は即ち是れ不可思議光如来なり。土は亦た是れ無量光明土なり」と確認されたことでもある。その後に『願成就文』を引文され

願成就文(大経卷上)言。「佛告阿難。无量壽佛威神光明、最尊第

一、諸佛光明所不能及。至<sup>乃</sup>是故无量壽佛、号无量光佛・无边

光佛・无导光佛・无对光佛・炎王光佛・清淨光佛・歡喜光佛・

智慧光佛・不斷光佛・難思光佛・无稱光佛・超日月光佛。其有

衆生、遇斯光者、三垢消滅、身意柔濡、歡喜踊躍、善心生焉。

若在三塗勤苦之處、見此光明、皆得休息、無復苦惱。壽終之後、

皆蒙解脫。<sup>(2)</sup>

(願成就の文にのたまはく、「仏、阿難に告げたまはく、無量

寿仏の威神光明、最尊第一にして、諸仏の光明の及ぶことあ

たはざるところなり、<sup>至乃</sup>このゆゑに無量寿仏をば無量光仏・

无边光仏・無碍光仏・無对光仏・炎王光仏・清淨光仏・歡喜

光仏・智慧光仏・不斷光仏・難思光仏・無称光仏・超日月光

仏と号す。それ衆生ありて、この光に遇ふものは、三垢消滅

し、身意柔軟なり。歡喜踊躍し善心生ず。もし三塗勤苦の処

にありて、この光明を見れば、みな休息を得てまた苦悩なけ

ん。寿終へてののち、みな解脫を蒙る。)

と、無量寿仏の光明が最尊第一の光明であることを明かし、又、無

量寿仏の異名の十二光仏を示す。この光明の徳が「三塗勤苦の処」に働く活動的仏であることを明かし、故に、光明の働きは歡喜踊躍、休息、解脫、慈心を得しめることを示す。このことは静止的な「理法」ではなく、一切の苦悩の衆生に積極的に働く活動の光明であることを明かし、無量寿仏の光明の本質を示すことを述べている。故に、この文は「真仏真土」の特色が、光明であることを最初に示すものである。

その光明について、『涅槃經』の引文より

光明者名不羸劣、不羸劣者名曰如来。又光明者名爲智慧。<sup>(3)</sup>

(光明は不羸劣と名づく。不羸劣とは名づけて如来といふ。

また光明は名づけて智慧とすと。)

無量寿仏の光明とは、漠然たる光明ではなく、「不羸劣」、衰えるこ

とのない如来の光明、即ち智慧であることを示される。

その知恵の光明の如来について、親鸞は『涅槃經』を引文し

如来者即是涅槃、涅槃者即是无盡、无盡者即是佛性、佛性者即

是決定、決定者即是阿耨多羅三藐三菩提。<sup>(4)</sup>

(如来はすなはちこれ涅槃なり、涅槃はすなはちこれ無尽なり、無尽はすなはちこれ仏性なり、仏性はすなはちこれ決定なり、決定はすなはちこれ阿耨多羅三藐三菩提なり、と。)

と、如来を涅槃・無尽・仏性・決定・阿耨多羅三藐三菩提と示され、さらに

一切有為、皆是无常。虚空无爲、是故爲常。佛性无爲、是故爲常。虚空者即是佛性、佛性者即是如來、如來者即是无爲、无爲者即是常、……中略……出般若波羅蜜、從般若波羅蜜出大涅槃。猶如醍醐。言醍醐者喻於佛性、佛性者即是如來。善男子、如是義故、說言如來所有功德、无量无边不可稱計。<sup>5)</sup>

（一切有為はみなこれ無常なり。虚空は無為なり、このゆゑに常とす。仏性は無為なり、このゆゑに常とす。虚空はすなはちこれ仏性なり、仏性はすなはちこれ如來なり、……中略……般若波羅蜜を出す、般若波羅蜜より大涅槃を出す。なほし醍醐のごとし。醍醐といふは仏性に喩ふ。仏性はすなはちこれ如來なり。善男子、かくのごときの義のゆゑに、説きて如來所有の功德、無量无边不可稱計とのたまへり、と。）

さらに無為にして常なる虚空、如來、醍醐、如來の功德を仏性と明かされ、浄土の在り方、如來の在り方、如來の徳を仏性と示されている。さらに、その如來の功德を、無量无边不可稱計と示される。又、『涅槃經』の文を引文され、

道與菩提及以涅槃、悉名為常。……中略……道者雖无色像可見、稱量可知、而實有用。<sup>至</sup>乃如衆生心、雖非是色、非長非短、非麁非細、非縛非解、非見、法而亦是。<sup>6)</sup>

（道と菩提および涅槃と、ことごとく名づけて常とす。道は色像なしといへども見つべし、稱量して知んぬべし、しかるに実に用ありと。<sup>至</sup>乃衆生の心のごときは、これ色にあらず、長にあらず短にあらず、粗にあらず細にあらず、縛にあらず

解にあらず、見にあらずといへども、法としてまたこれ有り、と。）

と、道と菩提と涅槃が常住であることを明かされている。「道者雖无色像可見、稱量可知、而實有用」を「色像無しと雖も見つべし。稱量して知りぬべし。而に実に用あり」と読みかえられ、涅槃あるいは涅槃に至る実践（道）が、超然たる静止的な理法でなく「見つべく、知りぬべき」ものであり「実に用あり」と「用（はたらき）」をもっているものであることを示され、真理の存在は常に変化せずにどんなものにも影響されず、さらに動いている動的な存在であることを『涅槃經』をもつて示されるのである。又、その後「徳王品」を引用し、

涅槃之性无苦无樂、是故涅槃名為大樂。以是義故、名大涅槃。……中略……諸佛如來、一切智故名爲大樂。以大樂故名大涅槃。四者身不壞故、名為大樂。身若可壞、則不名樂。如來之身金剛无壞、非煩惱身、无常之身故、名大樂以大樂故、名大涅槃。<sup>7)</sup>

（涅槃の性は無苦無樂なり。このゆゑに涅槃を名づけて大樂とす。この義をもつてのゆゑに大涅槃と名づく。……中略……諸仏如來は、一切智を以てのゆゑに名づけて大樂となす。大樂をもつてのゆゑに大涅槃と名づく。四つには身不壞のゆゑに名づけて大樂とす。身もし壞すべきは、すなはち樂と名づけず。如來の身は金剛にして壞なし。煩惱の身、無常の身にあらざるがゆゑに大樂と名づく。大樂をもつてのゆゑに大涅槃と名づく、と。）

と「大衆」を明かし、続いて

佛心无漏故名大淨。以大淨故名大涅槃。<sup>(8)</sup>

(仏心は無漏なるがゆゑに大淨と名づく。大淨をもつてのゆゑに大涅槃と名づく。)

と「大淨」を明かし、以上の文をまとめて

諸佛如來煩惱不起、是名涅槃。所有智慧、於法无導、是爲如來。如來非是凡夫・聲聞・緣覺・菩薩、是名佛性。如來身心智慧、徧滿无量无边阿僧祇土、无所鄣導、是名虛空。如來常住无有變易、名曰實相。以是義故、如來實不畢竟涅槃、是名菩薩。<sup>(9)</sup>

(諸仏如來は煩惱起らず、これを涅槃と名づく。所有の智慧、法において無碍なり、これを如來とす。如來はこれ凡夫・聲聞・緣覺・菩薩にあらず、これを仏性と名づく。如來は身心智慧、無量无边阿僧祇の土に遍満したまふに、障導するところなし、これを虚空と名づく。如來は常住にして變易あることなければ、名づけて実相といふ。この義をもつてのゆゑに、如來は實に畢竟涅槃にあらず、これを菩薩と名づく、と。)

「如來は是れ、凡夫・聲聞・緣覺・菩薩にあらず。是れを仏性と名づく。」というように、凡夫・聲聞・緣覺・菩薩とは異なる如來の「ありかた」であることを示して、「仏性」と示している。その如來の心身智慧が無量无边阿僧祇の土に遍満していることを「虚空」と明かしている。それを親鸞は「尊号真像銘文」に

この如來は智慧の相なり、十方微塵刹土にみちたまへりとしるべしとなり。<sup>(10)</sup>

と示して、如來の徳が十方世界に満ち満ちていることを示すもので、真仏真土が根源であり、それが大涅槃であり、仏性であり、智慧の光明であることを明かしている。光明の本質的存在である淨土の根源から、光明となつて働き続けていることを親鸞は『涅槃經』によつて領解されていたと考えられる。故に、「真仏土卷」の『涅槃經』の文は、淨土を智慧の光明の働く境界であることを示され、淨土は慈悲の境界というよりも智慧の境界と考えられる。

## 二

そこで親鸞は光明の存在性の意味について天親(ヴァスバンドウ)・曇鸞・善導の意をうけて示されていたと考えることができる。『涅槃經』をうけて親鸞は天親の『淨土論』を引文し、

世尊我一心 歸命盡十方 无導光如來 願生安樂國  
觀彼世界相 勝過三界道 究竟如虛空 廣大无边際<sup>(11)</sup>

(世尊、われ一心に尽十方の無碍光如來に歸命したてまつりて、安樂國に生ぜんと願ず。かの世界の相を觀するに、三界の道に勝過せり。究竟して虚空のごとし、廣大にして辺際なし、とのたまへり。)



と、『涅槃經』を受けながら、親鸞は天親が浄土の根源的存在の在り方について領解していたことに気づかれたのであろう。そのことは、尽十方無碍光如来の真仏として徳をあらわされ、真仏土が三世界の道に勝過し、「究竟して虚空の如く、広大にして辺際なき」世界であることが示されている。このことは、『涅槃經』に一貫する仏性の眞理性を示していると考ええる。故に、光明の仏土を示す活動的大悲が、如来・仏性であり、又、願生の働きをなすものが如来・仏性であることを示される。このことは仏の活動的はたらきの相を明かすと考えられる。

このことを受けて、曇鸞の『浄土論註』の清浄功德の文を引かれ、浄土が迷いの三界を超え、優れた清浄な世界である。煩惱成就の凡夫もこの浄土に生まれると、煩惱は断ちきられて涅槃の悟りを開くことができる。この文は、天親の浄土の所在を示す文を用いられたとも考えられ、浄土の功德である三嚴二十九種の莊嚴は法性法身無為法身である一法句を依り所としていることを含み述べられる。そして、性功德の文を引かれ

又（論註卷上）云。「正道大慈悲出世善根生。此二句、名莊嚴性功德成就。乃至性是本義。言此浄土隨順法性、不乖法本、事同華嚴經寶王如來性起義。又言、積習成性。指法藏菩薩集諸波羅蜜、積習所成。亦言性者是聖種性。序法藏菩薩、於世自在王佛所悟无生忍、爾時位名聖種性。於是性中、發四十八大願、修起此土。即曰安樂浄土、是彼因所得。果中說因、故名爲性。又言性者、是必然義、不改義。如海性一味、衆流入者必爲一味、海味不隨彼改也。又如人身性不淨故、種種妙好色・香・美味、入身皆爲

不淨。安樂浄土、諸往生者、无不淨色、无不淨心、畢竟皆得清浄平等无爲法身。以安樂國土清浄性成就故。」<sup>12)</sup>

（またいはく（論註・上）、正道の大慈悲は、出世の善根より生ず、とのたまへり。この二句は、莊嚴性功德成就と名づく。乃至性はこれ本の義なり。いふところは、これ浄土は法性に隨順して法本に乖かず。事、『華嚴經』の宝王如来の性起の義に同じ。またいふところは、積習して性を成ず。法藏菩薩を指す。もろもろの波羅蜜を集めて積習して成ぜるところなり。また性といふは、これ聖種性なり。序めに法藏菩薩、世自在王仏の所にして無生忍を悟る。そのときの位を聖種性と名づく。この性のなかにおいて四十八の大願を發して、この土を修起したまへり。すなはち安樂浄土といふ、これかの因の所得なり。果のなかに因を説く。ゆゑに名づけて性とす。また性といふは、これ必然の義なり、不改の義なり。海の性、一味にして衆流入るものかならず一味となつて、海の味はひ、かれに隨ひて改まらざるがごとしなり。また人身の性不淨なるがゆゑに、種々の妙好色・香・美味、身に入りぬれば、みな不淨となるがごとし。安樂浄土はもろもろの往生のひと、不淨の色なし、不淨の心なし。畢竟じてみな清浄平等無為法身を得しむ。安樂國土清浄の性、成就したまへるをもつてのゆゑなり。）

性功德の偈文に「正道の大慈悲は出世の善根より生ず」と示され、「浄土が世間を超出した法身の智に基づく善根から生じている。」と示される。その後、本の義について、「浄土は法性に隨順して法

本に乖かず」と浄土が如来自証の理智究意して、法のそのままがおのづから働いて起こる自然の姿に逆らわない。このことは真理そのものが自然の性起したものであることを意味するものである（一切の法の本体が揺るがないこと）。又、「積習して性を成ず」と積習成性の義を示し（法蔵菩薩が諸々の波羅蜜の行を積み重ね、それがついに大悲となつて性となつた性の結晶＝浄土）、又、性について必然の義（必ずそうであること、ここでは他をして必ず自身に同化させる）、不改の義（自分の本質が変わらない）が示され、浄土の根源の働く原理・浄土の本質が示される。このことは浄土の根源的存在を明かすもので、仏土の働きの存在の根源的意味を明かすことの大切さを親鸞は考えていた。

「法性に随順して法本に背かず」という、本の義を根底とした法蔵菩薩の発心と修行、それによって実現された安樂浄土について、そのあとに、

正道大道大慈悲出世善根生者、平等大道也。平等道所以名爲正道者、平等是諸法體相。以諸法平等故發心等、發心等故道等、道等故大慈悲等。大慈悲是佛道正因故、言正道大慈悲。慈悲有三緣。一者衆生緣、是小悲。二者有緣、是中悲。三者无缘、是大悲。大悲即是出世善也。安樂浄土從此大悲生故、故謂此大悲爲浄土之根。故曰出世善根生。<sup>12)</sup>

（正道の大慈悲は出世の善根より生ず、といふは、平等の大道なり。平等の道を名づけて正道とするゆゑは、平等はこれ諸法の体相なり。諸法平等なるをもつてのゆゑに発心等し、発心等しきがゆゑに道等し、道等しきがゆゑに大慈悲等し。

大慈悲はこれ仏道の正因なるがゆゑに、正道大慈悲とのたまへり。慈悲に三縁あり。一つには衆生縁、これ小悲なり。二つには法縁、これ中悲なり。三つには無縁、これ大悲なり。大悲はすなはちこれ出世の善なり。安樂浄土はこの大悲より生ずるがゆゑなればなり。ゆゑにこの大悲をいひて浄土の根とす。ゆゑに出世善根生といふなり、と。）

と、「正道の大道大慈悲」は大道として働く大悲であることを明かす。「安樂浄土」はこの大悲より生ずるが故に、この大悲を「浄土の善根」とであると。浄土の本質において衆生の摂化活動をしている大悲を根本とすることを示している。故に、「浄土の善根」とは、仏道の正因なる大慈悲で、浄土の本質であると親鸞は理解していたと考える。

性功德に示された大悲・発願・修行・浄土の建立の全体が、如来無縁の大悲の活動であることを。また、「性」とは根本という意味をもつ。その根本というのは浄土であり、その浄土は真如法性の理にかない、その理に随つて成就されたものである。故に、浄土・如来の無縁の大悲は、法の根本を示したものでその活動が仏性である。「真仏土巻」の性功德は仏性の功德と考えることができ、真理の根源の仏性が大慈悲であることを明かし、浄土の真理の存在性を明かしていると考ええる。

又、『浄土論註』最後の引文に「不虛作住持功德」が引文され、

又（論註）云。「何者莊嚴不虛作住持功德成就、偈言觀佛本願力遇无空過者、能令速満足功德大寶海故。不虛作住持功德成就

者、蓋は阿彌陀如來本願力也。<sup>至</sup>乃所言不虛作住持者、依本法藏菩薩四十八願、今日阿彌陀如來自在神力。願以成力、力以就願、願不徒然、力不虛設、力願相府、畢竟不差。故曰成就。<sup>13</sup>

（またいはく〔論註・下〕、「なにものか莊嚴不虛作住持功德成就、偈に、仏の本願力を觀するに、遇うて空しく過ぐるものなし。よくすみやかに功德大宝海を満足せしむといへるがゆゑにと。不虛作住持功德成就とは、けだしこれ阿彌陀如來の本願力なり。<sup>至</sup>乃いふところの不虛作住持は、本法藏菩薩の四十八願と、今日の阿彌陀如來の自在神力とによりてなり、願もつて力を成ず、力もつて願に就く。願徒然ならず、力虚設ならず。力願あひ符うて、畢竟じて差はず。ゆゑに成就といふ」と。）

と「願以つて力を成ず、力以つて願に就く、願徒然ならず、力虚設ならず、力願相符して、畢竟して差はず、故に成就と曰ふ」と、因なる願と果なる力との「相符」の事実として「力願相符」と示し、法藏菩薩の願・行が成就し、浄土が建立されていることを明かしている。このことは、法藏菩薩が浄土を莊嚴されたことを意味するものであることを明かしている。

親鸞は「真仏土巻」を説くに、真仏土は阿彌陀仏の清浄報土であると規定した。仏は不可思議光如來、土は無量光明土と示し、兩者はともに光明として身土不二である。そして、この光明土こそ、真如・解脱・大涅槃そのものである。如來は如（真理）より来生したものである。真如の働きそのものである。又、この働きは衆生を対象としている。故に、如來の働きは衆生を浄土願生せしむる働きで

（三）

衆生に向かったものである。そこに、如來の本願に遇うて空しくするものはないという働きが働くのである。ここに浄土建立の意味があり、浄土の存在性を示しているのである。

### 三

このことをうけて、次に善導の『讚阿彌陀仏偈』を引文し、

『讚阿彌陀佛偈』曰。曇鸞和尚造「南无阿彌陀佛」<sup>釋名无量壽傍經奉贊亦曰安養</sup>佛已來歷十劫、壽命方將无有量。法身光輪徧法界照世盲冥、故頂礼智慧光不可量、故佛又号无量光。……中略……稱其功德、故稽首。神光離相不可名、故佛又号无稱光。因光成佛、光赫然諸佛所嘆、故頂礼。光明照曜過日月、故佛号超日月光。釋迦佛嘆尚不盡、故我稽首无等等。<sup>14</sup>

（『讚阿彌陀佛偈』にはく、曇鸞和尚の造「南无阿彌陀仏」にして『無量寿傍經』と名づく、讃めたてまつりてまた安養といふ。成仏よりこのかた十劫を歴たまへり。寿命まさに量りあることなけん。法身の光輪、法界に徧じて世の盲冥を照らす、ゆゑに頂礼したてまつる。智慧の光明量るべからず、ゆゑに仏をまた無量光と号す。……中略……その功德を称せしむ、ゆゑに稽首したてまつる。神光は相を離れたること名づくべからず、ゆゑに仏をまた無称光と号す。光によりて成仏したまふ、光赫然たり、諸仏の嘆じたまふところなり、ゆゑに頂礼したてまつる。光明照曜して日月に過ぎたり、ゆゑに



仏を超日月光と号す。釈迦仏嘆じたまふことなほ尽きず、ゆゑにわれ無等等を稽首したてまつると。」

と、真仏土の意味を十二光によつて示し、阿弥陀仏を讃嘆する。ここで、最初に無量光について「智慧の光明量るべからず。」と光明を智慧と示される。しかし、無辺光・無対光については「光触と蒙るもの有無を離る。」「この光に遇うもの業繫除くる。」といい光明の慈悲の面について述べられる。又、智慧光については、「仏光能く無明の闇を破す。」と示され、光災王には「三塗の黒闇光啓を蒙る。」といい、やはり無明の闇に対する智慧の光明ということが示される。親鸞においては光と闇の関係が最も顕著にみることができ、故に、仏身については、徳の光明としての視覚的感念の真理的存在として示されている。

その後に、善導の『観經四帖疏』の「玄義分」が引用される。これは曇鸞の願力成就と関連して本願力の内容を説明していると考へる。

法藏比丘、在世饒王佛所、行菩薩道時、發四十八願、一一願言、若我得佛、十方衆生、稱我名号、願生我國、下至十念、若不生者、不取正覺。今既成佛、即是酬因之身也。……中略……然報・應二身者、眼目之異名。前翻報作應、後翻應作報。凡言報者、因行不虛、定招來果、以果應因、故名爲報。又三大僧祇所修萬行、必定應得菩提。今既道成、即是應身。……中略……若有法生滅相者、皆是變化。須菩提言。世尊、何等法非變化。佛言。若法无生无滅、是非變化。須菩提言。何等是不生不滅非

變化。佛言。无誑相涅槃、是法非變化。……中略……今既以斯聖教、驗知、彌陀定是報也。縱使後入涅槃、其義无妨。諸有智者、應知。問曰。彼佛及土、既言報者、報法高妙小聖難階、垢鄣凡夫云何得入。答曰。若論衆生垢鄣、實難忻趣。正由託佛願以作強緣、致使五乘齊入。<sup>15)</sup>

法藏比丘、世饒王仏の所にましまして、菩薩の道を行じたまひしとき、四十八願を發して、一々の願にのたまはく、もしわれ仏を得たらんに、十方の衆生、わが名号を稱して、わが國に生ぜんと願ぜん、下十念に至るまで、もし生ぜずは正覺を取らじ、と。いますでに成仏したまへり、すなはちこれ酬因の身なり。……中略……

しかるに報・應二身とは眼目の異名なり。前には報を翻じて応となす、後には応を翻じて報となす。おほよそ報といふは、因行虚しからず、さだめて來果を招く。果をもつて因に應ず。ゆゑに名づけて報とす。また三大僧祇の所修の万行、必定して菩提を得べし。いますでに道、成ぜり、すなはちこれ応身なり。……中略……もし法の生滅の相あるは、みなこれ變化なり、とのたまへり。須菩提まうさく、世尊、なんらの法か變化にあらざる、と。仏ののたまはく、もし法の無生無滅なる、これ變化にあらざる、と。須菩提まうさく、なんらかこれ不生不滅にして變化にあらざる、と。仏ののたまはく、誑相なき涅槃、この法變化にあらざる、と。……中略……いますでにこの聖教をもつて、あきらかに知んぬ、弥陀はさだめてこれ報なり。たとひのちに涅槃に入らん、その義妨げなけん。もろもろの有智のもの、知るべしと。問うていはく、かの仏

および土、すでに報といはば、報法高妙にして小聖階ひがたし。垢障の凡夫、いかんが入ることを得んやと。答へてはいはく、もし衆生の垢障を論ぜば、実に欣趣しがたく。まさしく仏願に託するによりて、もつて強縁となりて、五乗齊しく入らしむることを致す、と。

まず、善導が念仏成仏することについて、得往生の確信自証を法蔵菩薩が願成就し、酬因したことであると示している。そのことは因願酬報としての「報」の意義を示すもので、念仏者の成仏こそ阿弥陀如来が因の願に酬て成仏した「酬因の身」であることを証明する。

次に、仏身について「報・応二身は眼目の異名なり。」と述べ、報身と応身とは同じものであるとする。ここに、仏身の優劣を論じたり詮索をしていない。又、仏身というものは「果を以て因に応ず。」と述べ、「従果降因」を示す。このことは仏身を衆生自力の理知的分別により介入すべきでないことを示し、又「従果」は「如来」の根源として領解していたと考える。

その後、「もし法の生滅の相あるは、みなこれ変化なり。」と述べ、「是報非化」を論ずる。このことは、一切の法が変化する法である中に、涅槃・真如の一法のみは変化しないことを示し、絶対的根源性が常住の存在であることを示す。

そして、その文の終わりに、垢障の凡夫が、仏の願力によつて報土得生することを明かす。

善導の「是報非化」は、「仏の境界」ということであつた。「仏の境界」の意義は、三乗浅智の沙状を否定するとともに、弥陀の誓願

に依る凡夫の救済の正しいことを明らかに示すのである（仏土の存在を示すこと）。

（「仏の境界」は如来の本願海である。阿弥陀仏と浄土が、報身報土だということは、道綽・源信も述べているが、因願に酬報した報仏報土であるということ、五乗齊入ということで直結して論じられたのは善導である。親鸞は「真仏土巻」に因願酬報と因行酬報の両義の故に「報」であるといわず、また「大悲の因行の酬報する」とは言われていない。「大悲の誓願に酬報する」ということにおいて「報」であると親鸞は示したのである。）

その後、善導は「定善義」に

又今此觀門、等唯指方立相、住心而取境。總不明無相離念也。如來懸知末代罪濁凡夫、立相住心、尚不能得。何況離相而求事者、如似無術通人、居空立舍也。<sup>16)</sup>

（またいまこの觀門は等しくただ方を指し相を立てて、心を住めて境を取らしむ。総じて無相理念を明かさず。如来（釈尊）はるかに末代罪濁の凡夫の相を立てて心を住むるすらなほ得ることあたはず、いかにいはんや相を離れてことを求むるは、術通なき人の空に居して舍をたつるがごとし。）

と示し、浄土の位置について『大經』では「現に西方にまします。ここを去ること十万億刹なり。」「觀經」に「西方極樂国土」、さらに『阿弥陀經』に「これより西方に、十万億の仏土を過ぎて世界あり」とある。このことについて、善導は「指方立相」の浄土であることを明かしている。指方とは浄土を西方に指定することであり、

立相とは三蔵二十九種の莊嚴相を建立することである。(迷いの世界である娑婆の外に悟りの世界である浄土があるとし、浄土を完全な彼岸と見ていく表現が「指方立相」の文である。)

又、『法事讃』に

一切佛土皆嚴淨、凡夫亂想惑難生。如來別指西方國。從是超過  
 十萬億。<sup>17</sup>

(一切の浄土みな嚴淨なれども、凡夫の乱想おそらくは生じがたければ、如來(釈尊)別して西方の國を指したまふ。これより十方億を超過せり。)

と述べる。指方立相とは、乱想の凡夫が無相を得る趣入への道に引き入れるために、方向を指し相を立てて、凡夫の心を西方の一境に住せしめることを示す。しかし、釈尊が「別して西方の國を指したまふ。」と示すことは西方という表現そのものが無方を意味するものであり、辺際という表現がそのまま無辺際であり、又、相という表現がそのまま無相なのである。浄土は、方即無方・辺即無辺・相即無相である。しかし、凡夫の感覚・認識で受けとめられる面をもたなければならぬものであることを示す。浄土は「真空妙有」的存在として説かれているのである。第一義諦としての因縁生・空は、必然的に方便という世俗諦として相對界に示す有の面を顯現するのである。

親鸞は『真仏土卷』を結ぶに、

爾者、如來眞説、宗師釋義明知、顯安養淨刹眞報土。惑染衆生、

於此不能見性、所覆煩惱故、『經』(北本卷三五)(南本卷三三)言「我說十住菩薩少分見佛性。」故知、到安樂佛國。即必顯佛性。由本願力回向故。亦『經』(北本卷三五)(南本卷三三)言「衆生未來具足莊嚴清淨之身、而得見佛性。」<sup>18</sup>

(しかれば如來の眞説、宗師の釈義、あきらかに知んぬ、安養淨刹は眞の報土なることを顯す。惑染の衆生、ここにして性を見ることがあたはず、煩惱に覆はるるがゆゑに。『經』(涅槃經・迦葉品)には、「われ十住の菩薩、少分、仏性を見ると説く」とのたまへり。ゆゑに知んぬ、安樂仏國に到れば、すなはちかならず仏性を顯す。本願力の回向によるがゆゑに。また『經』(涅槃經・迦葉品)には「衆生未來に清淨の身を具足し莊嚴して、仏性を見ることが得」とのたまへり。)

と、眞土の意味を結ばれ、安養淨刹が眞実の報土であることを明かし、それは惑染の衆生の見仏性(顯仏性)の問題の解決を意味し、眞仏土であるが故に仏性が開かれることを示す。さらに

夫按報者、由如來願海酬報果成土、故曰報也。然就願海、有真有假。是以復就佛土有真有假。由選擇本願之正因、成就眞佛土。言眞佛者、『大經』(卷上)言「无边光佛・无导光佛、」又(大阿彌陀)言「諸佛中之王也、光明中之極尊也。」上『論』(淨土論)曰「歸命盡十方无导光如來」也。言眞土者、『大經』(平等覺)言「无量光阿彌土。」或(如來會)言「諸智土。」上『論』(淨土論)曰「究竟如虚空廣大无边際」也。言往生者、『大經』(卷上)言「皆受自然虚无之身无極之體」上『論』(淨土論)曰「如

來淨華衆正覺華化生。」又<sup>（論註）</sup>云「同一念佛无別道故。」<sup>（上）</sup>已又云難思議往生是也。……略……<sup>（19）</sup>

（それ報を案ずれば、如来の願海によりて果成の土を酬報せり。ゆゑに報といふなり。しかるに願海について真あり仮あり。ここをもつてまた仏土について真あり仮あり。

選択本願の正因によりて、真仏土を成就せり。真仏といふは、『大經』（上）には「無辺光仏・無碍光仏」とのたまへり、また「諸仏中の王なり、光明中の極尊なり」（大阿彌陀經・上）とのたまへり。<sup>上</sup>以『論』（淨土論）には「歸命尽十方無碍光如来」といへり。真土といふは、『大經』には「無量光明土」（平等覺經・二）とのたまへり、あるいは「諸智土」（如来會・下）とのたまへり。<sup>上</sup>以『論』（淨土論）には「究竟して虚空のごとし、廣大にして辺際なし」といふなり。往生といふは、『大經』（上）には「皆受自然虚無之身無極之体」とのたまへり。<sup>上</sup>以『論』（淨土論）には「如来淨華衆正覺華化生」といへり。また「同一念佛无別道故」（論註・下）といへり。<sup>上</sup>以また「難思議往生」（法事讃・上）といへるこれなり。

仮の仏土とは、下にありて知るべし。すでもつて真仮みなこれ大悲の願海に酬報せり。ゆゑに知んぬ、報仏土なりといふことを。まことに仮の仏土の業因千差なれば、土もまた千差なるべし。これを方便化身・化土と名づく。真仮を知らざるによりて、如来廣大の恩徳を迷失す。これによりて、いま真仏・真土を顕す。これすなはち真宗の正意なり。經家・論家の正説、淨土宗師の解義、仰いで敬信すべし。ことに奉持すべきなり。知るべしとなり。……略……）

（二六）

と、淨土が阿弥陀如来の因位に法藏菩薩の願が成就し、その願に酬報して、結果できあがつた淨土・仏国土であるから、真実報土であることを示す。しかし、如来の願の中にも真理の願と権仮方便の願があり、淨土にも真・仮の淨土がある。このことは、真土が大悲の第十八願によつて酬報されたものである。化土もまた大悲の第十九願・第二十願に酬報して建立された仏国土である。故に、化土もまた報仏土であることを示す。従つて、真仏土も化仏土も共に報仏土であることには変わりがない。ここに、第十九願・第二十願・第十八願の生因が密接に関連していることを示す。このことは、真実に至る方便として示される。この仏国土の存在は、我々が物事の道理の理解できない衆生に、真実の道を示すものである。如来の広大な恩徳に気付かず、自力の心に迷う身を真実の道に入れる働きとして、真仮の報仏土が示される。衆生が如何に、真実、真理の存在に気付かないものであるかを明かすものと言える。

#### 四

これらのことについて親鸞は『一念多念文意』に

一實眞如とまふすは、无上大涅槃なり、涅槃すなわち法性なり、法性すなわち如来なり、寶海とまふすは、よろづの衆生をきらはずさわりなく、へだてず、みちびきたまふを、大海のみづのへだてなきにたとへたまへるなり。この一如寶海よりかたちをあらわして、法藏菩薩となのりたまひて、无尋のちかひをおこ

したまふをたねとして、阿彌陀佛となりたまふがゆへに報身如來とまふすなり。これを盡十方无導光佛となづけたてまつれるなり、この如來を南无不可思議光佛ともまふすなり。この如來を方便法身とはまふすなり、方便とまふすは、かたちをあらわし、御なをしめして、衆生にしらしめたまふをまふすなり、すなわち阿彌陀佛なり。この如來は光明なり、光明は智慧なり、智慧はひかりのかたちなり、智慧またかたちなければ、不可思議光佛とまふすなり。この如來、十方微塵世界にみちくたまへるがゆへに无边光佛とまふす、しかれば世親菩薩は盡十方无導光如來となづけたてまつりたまへり。<sup>20)</sup>

又、『唯信鈔文意』に

「涅槃界」といふは、无明のまどひをひるがへして无上覺をさとするなり、界はさかひといふ、さとりをひらくさかひなりとするしべし。涅槃とまうすにその名无量なり、くはしくまうすにあたはず、おろくその名をあらはすべし。涅槃をば滅度といふ、无爲といふ、安樂といふ、常樂といふ、實相といふ、法身といふ、法性といふ、眞如といふ、一如といふ、佛性といふ、佛性すなはち如來なり。この如來微塵世界にみちくたまへるなり、草木國土ごとくみな成佛すときり。この一切有情の心に方便法身の誓願を信樂するがゆへに、この信心すなはち佛性なり、この佛性すなはち法性なり、法性すなはち法身なり。しかれば佛について二種の法身まします、ひとつには法性法身とまうす、ふた

つには方便法身とまうす。法性法身とまうすは、いろもなし、かたちもまします。しかればこゝろもおよばず、ことばもたえたり。この一如よりかたちをあらはして方便法身とまうす、その御すがたに法藏比丘となりのたまひて不可思議の四十八の大誓願をおこしあらはしたまふなり。この誓願のなかに、光明无量の本願、壽命无量の弘誓を本としてあらはれたまへる御かたちを、世親菩薩は盡十方无導光如來となづけたてまつりたまへり。この如來すなはち誓願の業因にむくひたまひて報身如來とまうすなり、すなはち阿彌陀如來とまうすなり。報といふはたねにむくひたるゆへなり。この報身より應化等の無量無數の身をあらはして、微塵世界に无導の智慧光をはなたしめたまふゆへに盡十方无導光佛とまうすひかりの御かたちにて、いろもまします、かたちもまします、すなはち法性法身におなじくして、无明のやみをはらひ、惡業にさへられず、このゆへに无導光とまうすなり。无導は有情の惡業煩惱にさへられずとなり。しかれば阿彌陀佛は光明なり、光明は智慧のかたちなりとするべし。<sup>21)</sup>

と、浄土としての仏土を述べ、仏土が涅槃界すなわち覺りの境界であることを明かす。その涅槃界も仏性であり、その仏性・眞如・法性法身から方便法身たる尽十方無碍光如來が顕現される。その如來は智慧の光明であつて無色無形であると示す。その無色無形の眞如から形をあらわされて方便法身（垂名示形）と姿を示し、衆生済度の誓願を成就して報身仏と示され、さらに、多くの応化身をあらわされる。



真如の世界は無色無形である故に「垂名示形」し、衆生が領解しやすいように光明となり、この世界に形を示したことを明らかにされる。親鸞はその光明を「かたち」であることを示している。私は「かたち」あるものは視覚で捉えられるものかと思いがちであるが、実存の世界では視覚に捉えられない「かたち」が存することを誤ってはならないことを示している。親鸞は光明が光というかたちで、真実・真理の存在であることに気づかれたのだと考える。その光明は根源からあらわれたものである故に、すべての智慧となって、実存の世界で無限の働きをなされていくことになる。この真如の世界におおわれている故に、救済されていくことを親鸞は天親によって領解していたと考える。故に、『教行信証』の総序には、

竊以、難思弘誓度難度海大船、无碍光明破无明闇惠日。<sup>22</sup>  
（無碍の光明は無明の闇を破する恵日なり。）

と示され、光明が無明を照破する智慧のはたらきの存在であることを冒頭に示されているのであると考える。

## 結

親鸞は『涅槃経』によって仏身仏土の存在性のあり方に気づかれたと考える。涅槃が静止的な理法ではなく、活動する動的な存在として捉えることができたのではないか。そして、天親の『浄土論』曇鸞の『浄土論註』によって法（真実）そのものが自ずから活動し

ている根源の本質的働きであること、又自然の姿であることに目覚められたと考える。又、善導によって浄土の根源が絶対的常住の存在であることに気づかれ、真如の世界は衆生に光明となって衆生済度の働きがなされていることを明かしている。我々は存在性といえど視覚に捉えているものであるかと思いがちである。光明の存在性は存在物として感じないものであるが、実存の世界でこそ、光明の働きが存在することに気づかされるのであると考える。

故に、浄土の実在は、物理的・空間的な在り方ではなく、意味的・象徴的存在の在り方と考える。また、浄土の時間的な表現で示せば、浄土は永遠・常住の世界である。単に時間的未來である来世や死後の世界ではない。現実の世界、現在の自己との関わりを持たねば意味がない。又、浄土が現在、この世にのみあると限定することも現実中心の偏った見方である。

すなわち、浄土は過去・現在・未來の三世を超えた永遠・常住の世界で、また不可思議の真実・光明の世界であって、無量光明土として絶えず無明の世界である娑婆・穢土に働きかけ明るく照らし続ける存在であると考ええる。

(22)	(21)	(20)	(19)	(18)	(17)	(16)	(15)	(14)	(13)	(12)	(11)	(10)	(9)	(8)	(7)	(6)	(5)	(4)	(3)	(2)	(1)
																				同書	『真宗聖教全書』
//	//	//	//	//	//	//	//	//	//	//	//	//	//	//	//	//	//	//	//	同卷	二卷
一頁	六三〇頁	六一六頁	一四一頁	一四〇頁	五八九頁	五一九頁	一三七頁	一三五頁	一三五頁	一三三頁	一三二頁	五六四頁	一二七頁	一二七頁	一二五頁	一二五頁	一二四頁	一二四頁	一二四頁	一二〇頁	一一〇頁

註

## 參考資料

- J・P・サルトル 著 澤田直 訳 『真理と実存』 二〇〇〇年  
人文書院
- 山折哲雄 著 『親鸞の浄土』 二〇〇七年 K・Kアートデイズ
- 山辺習学・赤沼智善 共著 『教行信証講義』 一九六四年 法蔵館
- 星野元豊 著 『講解教行信証』 一九九六年 法蔵館
- 三枝充恵 著 『縁起の思想』 二〇〇〇年 法蔵館
- 東光寛英 著 『浄土真宗の宗教的特色』 一九九五年 法蔵